須沢（すざわ）　栞（しおり）　氏　（東海大学建築都市学部建築学科特任講師）

略歴

1991 年新潟県生まれ。2021 年 3 月、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。博士（工学）。専門は、建築計画、住居学。日本学術振興会特別研究員（DC2）、日本女子大学家政学部住居学科助手・助教を経て、2023 年 4 月より現職。

受賞作『大規模災害時の広域避難と居住の復興――東日本大震災の記録
岩手県盛岡市の生活再建へ向けた支援』
（慶応義塾大学出版会、2026 年 2 月）

要旨

近年、大規模災害の発生後、市町村や都道府県の境界を越えて避難生活を送る「広域避難」が顕著となっている。東日本大震災では、福島第一原子力発電所事故に伴う全国規模の避難に加え、津波被害を受けた岩手県や宮城県でも、沿岸部から内陸部・都市部への避難が生じた。また、令和 6 年能登半島地震では、被災地外のホテル・旅館を活用した 2 次避難が大規模に実施されるなど、災害時の避難は一層広域化、多様化している。

一方、広域避難では、避難者が各地に分散するため、その所在や生活状況を把握することが難しい。さらに、避難元・避難先自治体の役割分担、避難先での住まいの確保、被災地への帰還や避難先での定住など、さまざまな課題が生じる。本書『大規模災害時の広域避難と居住の復興――東日本大震災の記録 岩手県盛岡市の生活再建へ向けた支援』は、東日本大震災後に沿岸被災地から多数の避難者を受け入れた岩手県盛岡市を対象として、広域避難の実態と、その後の住まい・生活の再建、長期にわたる支援のあり方を明らかにしたものである。

岩手県盛岡市では、震災後に 500 戸を超えるみなし仮設住宅が確保され、県内沿岸部を中心とするさまざまな地域から被災者が避難した。2011 年に開設された「もりおか復興支援センター」では、行政と市民団体が連携し、避難者の所在把握や個別訪問、生活相談、被災地の情報提供、自治体との仲介、交流機会の創出、住まいの移行支援などを長期にわたり継続してきた。

本書では、こうした支援の記録をたどるとともに、避難者のその後の居住動向を明らかにしている。盛岡市への避難後、元の居住地に「戻る」、盛岡市に「留まる」、別の地域に「移る」という 3 つの経路から捉えると、「留まる」世帯が約半数を占めた。また、被災地と避難先を行き来する生活、二つの地域に生活拠点を持つ暮らし、家族の一部のみが被災地へ戻る世帯分離など、「戻る／戻らない」という二者択一では捉えられない多様な居住の姿もみ

えてきた。

こうした多様な生活再建に対し、既存の支援制度が十分に対応できない場面も生じている。応急仮設住宅、被災者生活再建支援金、災害公営住宅などの制度が複雑に関係し、広域避難や世帯分離によって制度の想定から外れるケースもみられた。利用できると思っていた制度が利用できない、後から新たな選択肢が示される、一度選択すると別の経路へ変更しにくいといった問題は、被災者が生活再建の「見通し」を持つことを難しくする。また、時間の経過とともに避難者の状況や支援ニーズも変化するため、災害時の特別な支援から、住宅セーフティネットや地域福祉など平時の支援へどのようにつなぐかも重要な課題となる。

本書が重視するのは、住宅の供給戸数や復興事業の進捗だけではなく、生活する人の側から「住むこと」を捉える視点である。広域避難を一時的な避難現象としてではなく、避難、仮住まい、再建・定住へと続く長期的な過程として捉え、そのなかで変化する一人ひとりの選択や生活に目を向ける。盛岡市で長年積み重ねられてきた経験と教訓をもとに、今後の大規模災害における、地域を越えて避難した被災者の「居住」の復興のあり方を提示することを試みたものである。